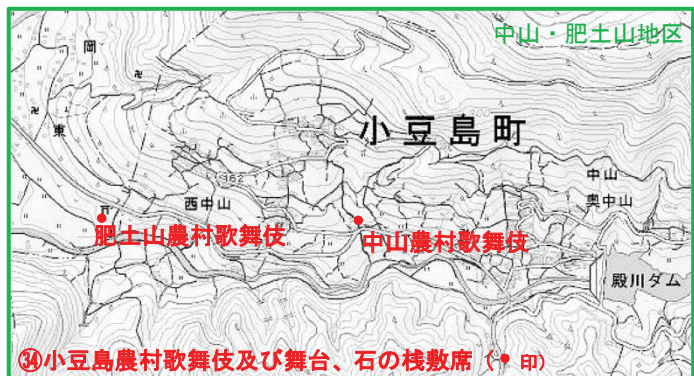
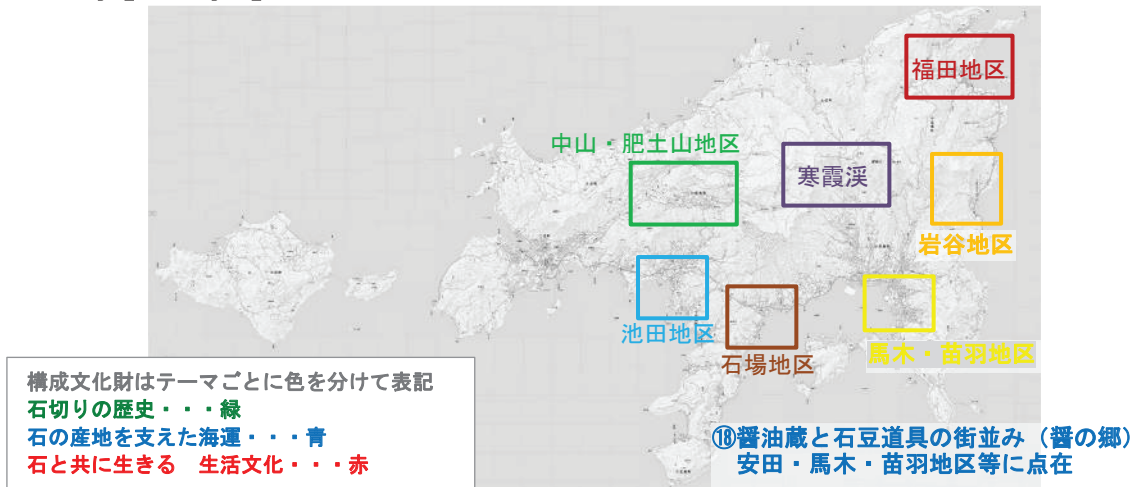


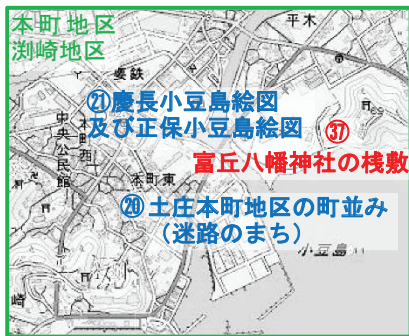
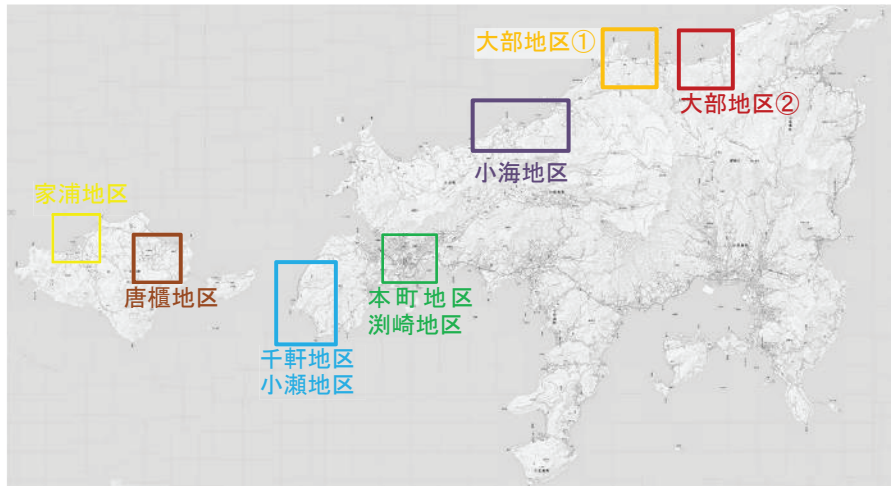
① 申請者	◎笠岡市, 丸亀市, 土庄町, 小豆島町	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
(ふりがな)	しってる!? ゆうきゅうのときながれるいしのしま ～うみをこえ, にほんのいしづえをきずいた せとうちびさんしょう～		
知ってる!? 悠久の時間が流れる石の島 ～海を越え, 日本の礎を築いた せとうち備讃諸島～			
④ ストーリーの概要 (200字程度)			
<p>瀬戸内備讃諸島の花崗岩と石切り技術は長きにわたり日本の建築文化を支えてきた。日本の近代化を象徴する日本銀行本店本館などの西洋建築, また古くは近世城郭の代表である大坂城の石垣など, 日本のランドマークとなる建造物が, ここから切り出された石で築かれている。島々には, 400年に渡って巨石を切り, 加工し, 海を通じて運び, 石と共に生きてきた人たちの希有な産業文化が息づいている。世紀を越えて石を切り出した^{ちょうば}丁場は独特の壮観な景観を形成し, 船を操り巨石を運んだ民は, 富と迷路の様な集落を遺した。今なお, 石にまつわる信仰や生活文化, 芸能が継承されている。</p>			
			<p>明治生命館 (1934 年) ※備讃諸島の石 大坂城石垣石丁場の残石群</p>
<p>400 年前の巨石を「切る」採石 作業風景想像図</p>			<p>明治生命館の石丁場 海の民の海運力を物語る笠島集落</p>

構成文化財の位置図（地図等）

小豆島【小豆島町】



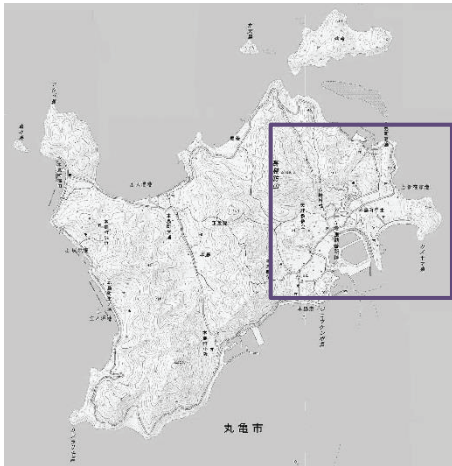
小豆島・豊島【土庄町】



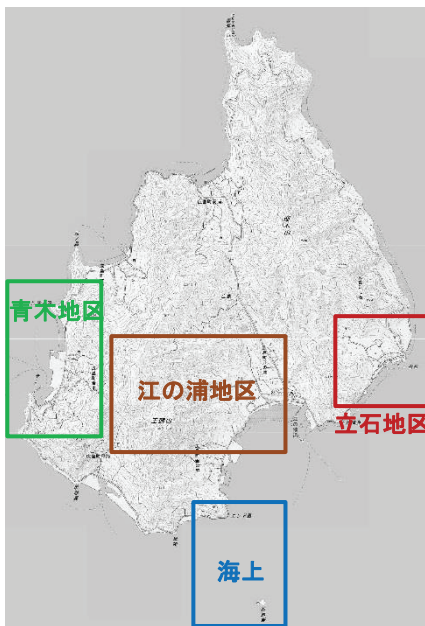
小豆島の全島的な構成文化財
 ⑬小豆島の山岳霊場 ⑭石節 ⑮しし垣

構成文化財はテーマごとに色を分けて表記
 石切りの歴史・・・緑
 石の産地を支えた海運・・・青
 石と共に生きる 生活文化・・・赤

本島【丸亀市】



広島【丸亀市】



江の浦地区



青木地区



海上



立石地区



高島・白石島・北木島・真鍋島・大飛島・六島【笠岡市】※笠岡諸島



高島



構成文化財はテーマごとに色を分けて表記
石切りの歴史・・・緑
石の産地を支えた海運・・・青
石と共に生きる 生活文化・・・赤

真鍋島



大飛島



六島

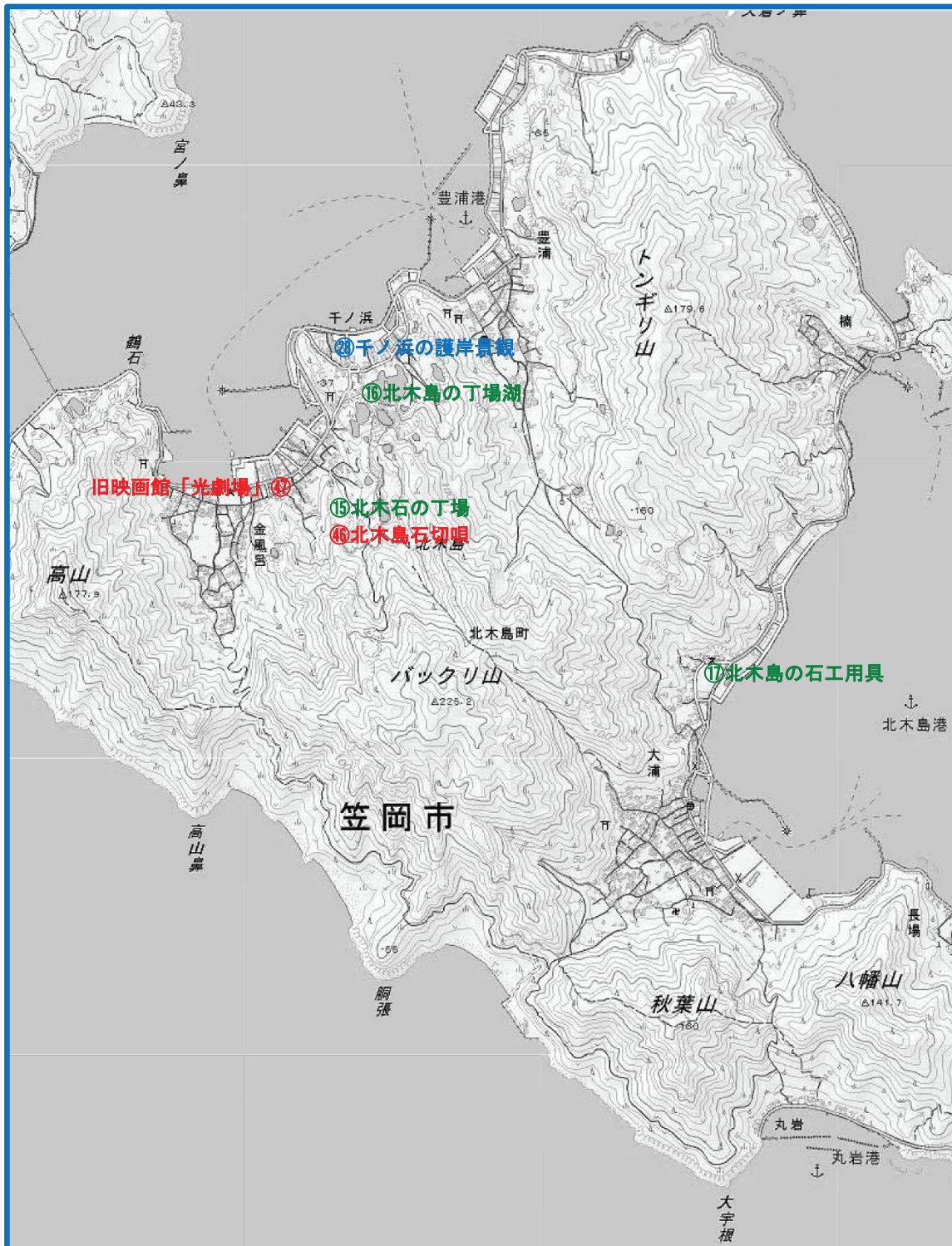


白石島



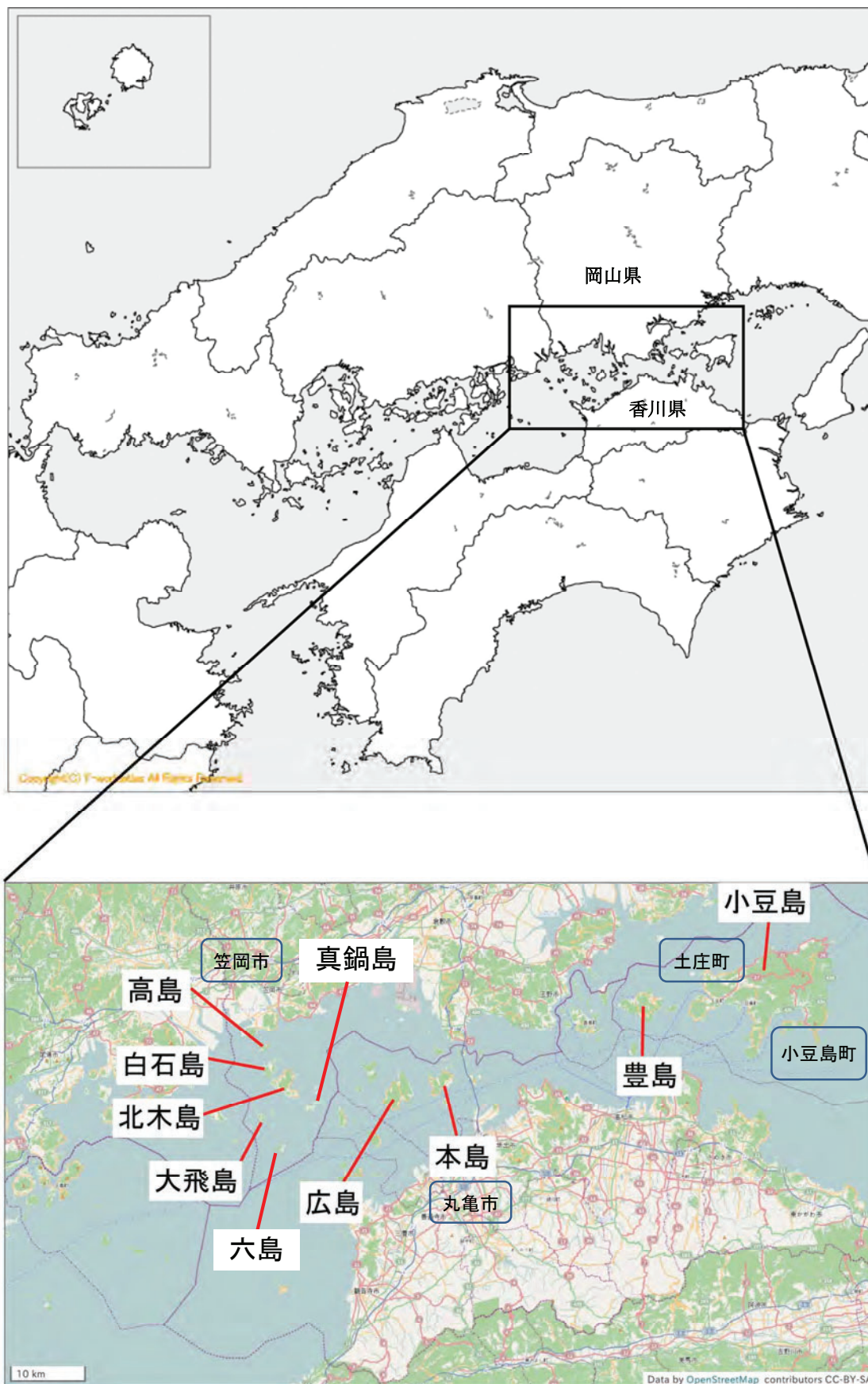
構成文化財はテーマごとに色を分けて表記
石切りの歴史・・・緑
石の産地を支えた海運・・・青
石と共に生きる 生活文化・・・赤

北木島



構成文化財はテーマごとに色を分けて表記
石切りの歴史・・・緑
石の産地を支えた海運・・・青
石と共に生きる 生活文化・・・赤

市町村の位置図 (地図等)



ストーリー

1 日本の建築文化を支え続ける石

日本の近代化が進んだ明治後期から昭和初期にかけて、国家事業として建設された日本銀行本店本館をはじめ、明治生命館などの日本を代表する近代洋風建築が建てられたが、そこには瀬戸内海の島々、とりわけ岡山県と香川県の間を展開する備讃諸島で生まれた花崗岩が使われてきた。

一方で、我が国が世界に誇る石造建造物である、近世城郭の石垣。その技術的頂点とも言われるのが、大坂城の石垣である。大坂城は、徳川幕府が西国・北国の大名63藩64家を大動員して、元和6年(1620)から寛永6年(1629)の間に再建した。大名たちは競うように巨大な石を運び込み、最高・最多量といわれる壮大な石垣を築き上げた。この石垣にも、遠く離れた備讃諸島から運ばれてきた石材が大量に使われている。

これらの日本を象徴する歴史的建造物は、備讃諸島の石なくして語ることはできない。

2 石切りの歴史

原産地となった瀬戸内の備讃諸島は、小豆島、塩飽諸島、笠岡諸島などを含んでおり、その名のとおりに大小無数の島々が本州と四国の間に展開して、典型的な多島海景観を見せている。

島には平地が少なく、山肌から海岸まで、至るところに花崗岩などの巨石がむき出しとなっている。このような特性を活かして、江戸時代以降、良質の石が切り出され、建造物に使われるようになっていった。

その400年の歴史が凝縮されているのが、^{ちょうば}丁場と呼ばれる石切場である。石に鉄製の矢(クサビ)を打ち込み、割りとることを「切る」という。大きな石を切るためには、石の目を読む高度な技術と、そのための道具が必要である。

小豆島に残る江戸時代の大坂城石垣の丁場跡では、直径2～3m、あるいはそれ以上の大きさの割石が、山肌に沿ってあたり一面に転がっている。その様は、大名たちによるダイナミックな石切りの様子を如実に物語っており、連続して矢(クサビ)を打ち込んだ痕や、採石した者の証となる刻印から、当時の技術をうかがい知ることができる。

巨石を切り出す技術者達の来島によって、豊富な花崗岩を使いこなす文化が島に生まれた。塩飽本島では、木鳥神社鳥居や島の統治者「年寄」の墓などの大形石造物が、この頃から造られるようになった。

明治以降、花崗岩の採石は地場産業として確立されていった。そんな中、笠岡諸島の北木島から切り出された「北木石」と呼ばれる花崗岩は東京をはじめ、全国各地の近代建築に使われてきた。北木石を使った重要文化財建造物は、先述の2棟に加えて、横浜正金銀行(現神奈川県立歴史博物館)、大阪市中央公会堂、日本橋、東京駅丸ノ内本屋、三越日本橋本店など、枚挙にいとまが無い。

1950年代の機械化によって、あたかも「山を切る」ような採石が可能となってからも、石工たちは良質の石を追い求め、下へ下へと深く切り進んでいった。その結果、まるで天空にそびえ立つ断崖絶壁のような丁場が誕生した。明治25年(1892)に始まり現在でも石を切り続ける丁場は、ついに高さ100mの峡谷となって、そこに立つ者の足をすくませる。

これら備讃諸島の島々を巡ることによって、400年にわたる採石技術の変遷を見聞きし、体感することができる。



大坂城石垣石丁場跡(1620年代)

明治生命館ほか石丁場
(1892年～現在)

巨石の積み出し(1930年頃)

3 石の産地を支えた海運

一見、海によって本土から隔離した島々で、これほどまでに採石が発展したのはなぜか。

それは、海があったからである。島々は海によってつながっていた。海こそが、巨大な石を遠隔地まで運ぶために不可欠な「道」だったのである。

西日本における海上交通の大動脈でもあった瀬戸内海の島々には、海の「道」港町が形成された。切った巨石を積み出すための産業港は、自然の地形を利用した入り江を物流の拠点にした。小さな積み出し港には大小の端材を巧みに組み上げた護岸が遺っている。物流施設として、花崗岩を積み上げた石壁の倉庫が、原産地ならではの佇まいを見せ、醤油蔵の前には、醤油しぼりに欠かせない地元石材の重石がずらりと並べられている。

江戸時代、巨石の運搬に塩飽の民が携わったことが知られているが、100トンを超える石を運んだその海運力と優れた操船技術は中世の塩飽水軍にさかのぼる。塩飽諸島は、中世には塩飽水軍、江戸時代には塩飽廻船の根拠地でもあり、幕末、咸臨丸の乗組員を多数輩出する船乗りたちの聖地であった。

備讃瀬戸の島々では、街路が屈曲し、十字路を形成しない複雑な町割りを残した集落が見られるが、塩飽の中核となる本島の笠島地区では、山城のある丘陵に三方を囲まれつつ、狭い道路が複雑に食い違い、見通しがきかない防衛的な構造を示す一方、マッコ通り（町通り）と呼ばれる主要道路に沿って町屋形式の家屋が建ち並ぶ伝統的な集落が、海の民の経済力を物語っている。

笠岡諸島の真鍋島では、塩飽水軍と並び立つ中世真鍋水軍の拠点にふさわしく、山城のふもとに防衛的な町割りの集落が展開する。また小豆島の土庄集落は「迷路のまち」と呼ばれるだけあって、地図がなければ方角を見失ってしまいそうになる。備讃瀬戸の島は、はげ山、岩場、砂浜など変化に富み、花崗岩の地質が露出し景観を形成している。島の中で山と海が一体となりコンパクトにまとまっていることが、石切りと石の陸運、海運を容易ならしめたのである。



石の島ならではの積み出し港



海の民の繁栄をしのばせる笠島の町並み



「迷路のまち」と呼ばれる土庄集落

4 石と共に生きる 生活文化

備讃諸島の島民は太古の時代より、島に点在する大きな石と共に生きてきた。富と豊かさをもたらす山の巨石は島民の精神文化と結びつき、崇拜と祈りの対象となってきた。また、岩肌をくり抜いた山岳霊場などには、おかげにあやかろうとその地を訪れる人が後をたたない。

最盛期、島は石切りから加工、商い、出荷、海運まで石材産業が島内で完結した産業都市として賑わった。特筆すべきは、石の営みを支える石工たちの生活文化であろう。島の石材産業は富を生み、営みは文化と娯楽を島に遺した。民家の中につくられた学校の小講堂のような映画館が、昭和期、石工の娯楽のために映画を上映した昔日の賑わいを物語る。

石工たちの労働歌である石切唄、それを踊りとして継承する石節、ハレの日に石工にふるまったという伝統の石切り寿司など、産業を支え力強く生きた石工たちの希少な伝統文化が今も日々の暮らしに息づいている。

さあ、「船」という入口を通して、「島」という非日常の世界へ出かけて行こう。瀬戸内式気候特有の青空と、ゆったりと過ごす時間、海を感じながら石の文化に触れる旅が、あなたを待っている。



巨石信仰 重岩



復活した映画館 光劇場



伝統食 石切り寿司

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
石切りの歴史				
①	<p>おおさかじょういしがきいしちょうば あと 大坂城石垣石丁場跡 てんぐいわちょうば てんぐいわ 【天狗岩丁場・天狗岩 磯丁場・南谷丁場・ いそちょうば みなみたにちょうば 豆腐石丁場・亀崎丁場・ とうふいしちょうば かめさきちょうば はちにんいしちょうば 八人石丁場】</p>	国史跡	海上輸送に便利な瀬戸内の島々に採石地を求めて各大名が競って丁場を拓いたが、現在でも当時の様子を色濃く残すのが黒田家が開いた岩谷地区の丁場である。総数1600個を超える石が残されており、当時の石工の技術を目の当たりにできる貴重な場所である。天狗岩磯丁場の海中にあるかもめ石は船の係留施設と考えられており、山から海岸へ石を出し、船で大坂まで運んだことがイメージできる場所である。	香川県 小豆島町
②	<p>おおさかじょうようざんせき 大坂城用残石 ばんやしちべ えやしきあと 番屋七兵衛屋敷跡</p>	県史跡	小豆島では石丁場が各地に開かれたが、特に岩谷の丁場跡には現在でも大量に手つかずの石材が残されている。黒田家が江戸時代に石の管理者（番屋）をこの地に置き、石の数や状態を把握していたことを示す場所である。現在でも多くの石材が残されているのは、番屋の存在が大きかったといわれている。	香川県 小豆島町
③	<p>おおさかじょうちくじょうざんせき ふく 大坂城築城残石（福 だ 田）</p>	町史跡	小豆島福田地区には、築城の名手として知られる藤堂高虎の御用丁場として、東谷丁場・西谷丁場・外明神丁場・鯛網代丁場の4丁場があることが小豆島九か村高反別明細帳に記されている。	香川県 小豆島町
④	<p>もりがたきちょうばあと 森ヶ滝丁場跡</p>	未指定 (文化的景観)	明治以降の福田地区の石材業を支えていた採石場跡。現在では、岩を切り進めたなごりとして、岩肌のノミの跡や、雨水のたまった丁場湖などから当時の盛隆をうかがい知ることができる。	香川県 小豆島町

⑤	やま かみまつ 山の神祭り	未指定 (無形民俗)	大坂城築城時の藤堂高虎の丁場とされる西谷丁場の近くにある大山祇神社では、毎年1月9日に“技術の習得”と“安全”を祈願する「山の神祭り」が地元住民の手で行われ続けている。石工と石船により隆盛を極めたこの地区を特徴づける行事の一つである。	香川県 小豆島町
⑥	おおさかじょうちくじょうざんせき いし 大坂城築城残石(石 場)	町史跡	田中筑後守支配の碎石場であり、積出港としてもにぎわっていた場所である。この地に残された石には「田のちくこの」の代表刻印があり、大坂城石垣にも「田筑後」「小豆島」の刻印が確認されている。	香川県 小豆島町
⑦	おおさかじょういしがきいしきり こし 大坂城石垣石切とび越 ちようばあと お み ざんせきぐん 丁場跡および小海残石群 おおさかじょうざんせき ねんこう (大坂城残石記念公 園)	県史跡	史跡「大坂城石垣石切とび越丁場跡および小海残石群」と小海に点在する大坂城石垣石丁場の史跡とともに徳川時代の大坂城の石垣に関する資料、この地の石工が使用してきた道具などが展示されており、石工の技術を垣間見られる空間を提供している。	香川県 土庄町
⑧	おおさかじょういしがきいしきりきたやま 大坂城石垣石切北山・ とびがらす・宮ノ上丁 場跡	町史跡	大坂城残石記念公園が立地する近辺に細川家が采配した丁場跡が残されている。丁場跡には平石、そげ石など大小の残石が散在している。小豆島に残されている古文書からも、細川家と丁場跡との関係を知ることができる。	香川県 土庄町
⑨	おおさかじょういしがきいしきりせん げちよう 大坂城石垣石切千軒丁 ばあと こ せ ばらちよう ばあと 場跡・小瀬原丁場跡	県史跡	この二つの丁場は肥後熊本城加藤肥後守の丁場であり、土庄村庄屋笠井家に加藤家の人々が宿泊して監督したといわれている。蛇の目紋の刻印が確認でき、加藤家が担当した大坂城の石垣石にも同様の刻印が確認できる。加藤家から贈られた佩刀(県指定)・珠数・古墨も現在まで伝えられている。	香川県 土庄町
⑩	はちまんじんじやいしどり い 八幡神社石鳥居	県有形 (建造物)	豊島で採掘された豊島石(角礫凝灰岩)で建造された室町時代の大鳥居があり、豊島の職人の技が見ることができる。	香川県 土庄町
⑪	しわくほんじまたかんぼうやま 塩飽本島高無坊山 いしきりちよう ばあと 石切丁場跡	市史跡	大坂城築城時に細川家の丁場として稼働していた場所である。細川家文書より三期にわたる普請のうち、二期と三期にこの場所の石材を搬出したことがわかっている。塩飽水軍のお膝元であるこの地から石材が出されたことは、地域資料からもうかがえる。	香川県 丸亀市

⑫	としより はか 年寄の墓	国史跡	塩飽水軍を統治した塩飽衆の代表者である年寄の墓。大坂城築城と同時期の寛永 3 年(1626)に建立が始まった。高さ 3 m を超える花崗岩の碑が代々建立されており、年寄の権力の強さを彷彿させる。	香川県 丸亀市
⑬	こがらすじんじゃとり い 木鳥神社鳥居	市有形 (建造物)	本島の泊地区にある大国主神・天押立神・少彦名神を祀る木鳥神社の鳥居。大坂城築城と同時期、寛永 4 年(1627)の建立で、大坂城築城に関わった伝説のある薩摩の石工紀加兵衛や地元の九郎兵衛らによって製作された。どっしりとした太い石組みが、塩飽の反映をうかがわせる。様式は明神鳥居で、笠木は両端を蕨手状に丸く盛り上げた特徴のある造りである。	香川県 丸亀市
⑭	いし きとしりょうかん 石の里資料館 しゅうぞうしりょう 収蔵資料	未指定 (有形民俗)	旧広島西小学校の一部を利用して、広島産出の花崗岩「青木石」の歴史や石切の道具、生活道具などを展示している。塩飽諸島の一つとして、石材搬出を行い続けた石の島の姿を知ることができる。	香川県 丸亀市
⑮	きたぎいし ちょうぼ 北木石の丁場	未指定 (文化的景観)	北木島の <small>こかなぶる</small> 小金風呂にある花崗岩「北木石」の採石場は、明治 2 5 年(1892)に開かれ、現在も採石が続いている。ここから切り出された石は、明治生命館、東京駅丸ノ内本屋などの重要文化財に使われている。良質の石を求めて地下深くへと掘り進んだ結果、天に向かってそそり立つ岩壁が誕生した。展望台から、その壮大な景色を堪能できる。	岡山県 笠岡市
⑯	きたぎしま ちょうぼこ 北木島の丁場湖	未指定 (文化的景観)	千ノ浜地区でかつて採石していた丁場が操業停止し、そこに雨水が溜まって湖のような景観となった。採石の歴史を物語る産業遺産であると同時に、山水画のような景色を見せる。採石道具を手入れする「ふいご小屋」も遺り、近代期の石材産業のあり方を彷彿とさせる。	岡山県 笠岡市
⑰	きたぎしま いしくようぐ 北木島の石工用具	国登録 有形民俗	北木島では手作業で採石を行っていた明治時代から、戦後の機械化された時代に至るまでの採石・加工・鍛冶・運搬等に使われた石工道具 1 9 9 点が収集されている。北木中学校の北木石記念室に展示されている。	岡山県 笠岡市

石の産地を支えた海運				
⑱	しょうゆぐら いしどうぐ まちな 醤油蔵と石道具の街並み (ひしお さと) (醬の郷)	国登録有形 (建造物)	石材運搬は上方から醤油文化を小豆島にもたらし、石は醤油産業に欠かせない道具として使われてきた。醤油工場や蔵が建ち並ぶ「醬の郷(ひしおのさと)」では、戦後まで重石として使われていた石が並べられ、町の景観に溶け込んでいる。	香川県 小豆島町
⑲	おおべ ぼあと 大部ろくろ場跡	町史跡	大坂城石垣用の石材を船積みするために自然の海岸を利用してつくられたろくろ場跡である。中川内膳正久盛が采配した丁場としても知られており、切り出した石材をろくろ場から船へ積み出したものと思われる。	香川県 土庄町
⑳	とのしょうほんまち ちく 土庄本町地区の まちな 町並み めいろ (迷路のまち)	未指定 (文化的景観)	土庄本町地区にある路地が複雑に入り組む「迷路のまち」は、備讃諸島を代表する歴史的な集落のひとつ。境内から迷路のまちを一望できる西光寺や採石奉行加藤清正ゆかりの屋敷跡も残る。	香川県 土庄町
㉑	けいちょうしょうどしまえ ず 慶長小豆島絵図 およ しょうほうしょうどしまえ ず 及び正保小豆島絵図	県歴史資料	石材の運搬に欠かせない瀬戸内海航路。小豆島の港とそれを結ぶ各地が示されている。塩飽水軍をはじめ海の民の航海術を応用した測量技術を用い作成された絵図である。	香川県 土庄町
㉒	しわくきんばんしよ 塩飽勤番所	国史跡	物流の大動脈である瀬戸内海で活躍した塩飽の政治の中心地が塩飽勤番所であり、塩飽全島を統率した。信長・秀吉・家康など時の天下人からも高く信頼された塩飽衆は、「人名」と称し自治を認められた。その朱印状が今も残されている。瀬戸内海の石材運搬のカギを握った海の民の偉業と歴史を伝える貴重な場所。	香川県 丸亀市
㉓	かさしましゅうらく 笠島集落	国重伝建	塩飽水軍、塩飽廻船の拠点であった当時の繁栄、海の民の経済力を象徴する港町。本島の中心港であったこの場所は花崗岩の石畳などと共に、「マッチョ通り(町通り)」と呼ばれる主要道路に沿って町屋建築が立ち並び、塩飽大工の伝統的な技術を今に伝えている。	香川県 丸亀市

②④	ちとせざ 千歳座	市有形 (建造物)	塩飽水軍の末裔たちは近世以降、廻船や大工の分野で高い技術力を発揮し、塩飽を離れ各地域で活躍した。本島の泊地区にある千歳座は塩飽大工により文久 2 年 (1862) に建設された芝居小屋で、基壇には本島の花崗岩が使用されている。塩飽の繁栄や風俗を物語る貴重な建物として、今も島民らが活用している。	香川県 丸亀市
②⑤	はぶしいわとうひょう 波節岩灯標	未指定 (建造物)	広島以南約 1km の沖に浮かぶ直径 50m の岩礁 (波節岩) の上に設置された灯標 (灯台) である。高さ 13m の灯台は花崗岩の切石を積み上げて作られている。	香川県 丸亀市
②⑥	いしぐら 石蔵 きゅうはぶしいわとうひょう (旧波節岩灯標 脂油庫)	未指定 (建造物)	花崗岩の外壁を持つ石蔵である。灯標用油の貯蔵庫として活用されていた。石材の仕上げ方の違いによる壁面のコントラストが美しい。灯標と同じく明治 28 年 (1895) に竣工されたもの。	香川県 丸亀市
②⑦	おのえてい 尾上邸	未指定 (建造物)	まるで城のような高い石垣をめぐらせた豪壮な建物は、江戸時代に千石船で繁栄した面影をよく残しており、“塩飽大工”と呼ばれた人たちの技術が随所に発揮されている。島で採掘される青木石を高く積み上げた石垣とおよそ 200 年前に建てられた総ケヤキ造りの家屋が当時をしのばせる。	香川県 丸亀市
②⑧	ち はま ごがんけいかん 千ノ浜の護岸景観	未指定 (文化的景観)	千ノ浜の海岸は採石の廃土石により埋め立てられ、小さな石の積み出し港としても利用された。採石で発生した端材を利用して護岸が築かれている。矢穴の残る大小の石を巧みに組み合わせる様は、原産地ならではの光景。	岡山県 笠岡市
②⑨	まなべけじゅうたく 真鍋家住宅	国登録 (建造物)	かつて真鍋水軍の本拠地であった真鍋島の集落は、海の道を担った備讃諸島を代表する、歴史的な集落の一つ。十字路を形成せず、中世から続く防衛集落的な構造をよく残している。真鍋家住宅は真鍋鉄屋本家の住宅として、島の集落景観を代表する建物。	岡山県 笠岡市

③⑩	おおいしやま 大石山	未指定 (名勝地)	六島の大石山には、その名のとおり至る所に花崗岩の巨石がある。大正11年(1922)、山の南側中腹、瀬戸内海の東西幹線航路を一望できる場所へ灯台が建てられ、航路の近代化に貢献した。灯台は昭和59年(1984)に改築されたが、大小の船舶が行き交う瀬戸内の、海の道を象徴する景観は、今も変わらない。	岡山県 笠岡市
石と共に生きる 生活文化				
③⑪	かんかけやま かんかけい 神懸山 (寒霞溪)	国名勝	備讃瀬戸の巨石・奇岩を象徴する場所。表12景、裏8景と溪谷のいたるところで長年の風化により形作られた奇岩を見ることができる。神懸山を含む山地一帯が霊地として古来信仰されている。	香川県 小豆島町
③⑫	いけだ さじき 池田の棧敷	国重要 有形民俗	瀬戸の海に面して、自然の地形を巧みに利用し、石を野面積にした棧敷の傑作である。石積の技術の最高傑作ともいえる。現在も祭礼の見物席として活用されている。	香川県 小豆島町
③⑬	しょうどしま さんがくれいじょう 小豆島の山岳霊場	未指定 (建造物)	空海が開いたとされる小豆島八十八ヶ所には、険しい石崖の洞窟に本尊を祀る山岳霊場が多く見られ、石と信仰の結びつきを物語る。西ノ滝はその典型で、小豆島最古の寺と言われ、境内から瀬戸内海を一望できる。	香川県 小豆島町・ 土庄町
③⑭	しょうどしまのうそん かぶき 小豆島農村歌舞伎 及び舞台、石の棧敷席	国重要有形民俗 ／県無形民俗	小豆島の中山間地域である中山地区と肥土山地区には、石積みで作られた棧敷席、舞台とともに、農村歌舞伎が受け継がれている。その周辺には石積の技術を駆使し、土地の少ない島に田畑を作りあげた棚田「千枚田」がある。石と共に歩む島の人々の知恵と技術が美しい棚田の景色を作り上げ、豊作を祈願し農村歌舞伎を奉納し続けている。	香川県 小豆島町・ 土庄町
③⑮	かさねいわ 重岩	未指定 (地質鉱物)	小瀬石鎚神社のご神体として祀られていた巨石であり、小瀬原丁場跡の急峻な山道を登りきった山頂に重なり合って鎮座している。神が宿る石として、人々の石への信仰心がうかがえる。	香川県 土庄町

③⑥	いしき ずし 石切り寿司	未指定 (無形)	日々過酷な重労働をしていた石工たちにふるまわれた食事として「石切り寿司」がある。石工の祭りである鞆祭りや山の神祭り、聖徳太子講などでふるまわれていたかもしれない。小豆島の北部では祭りなどのハレ食として現在でも伝えられている。	香川県 土庄町
③⑦	とみおかはちまんじんじゃ さじき 富丘八幡神社の棧敷	町有形民俗	山林の傾斜地を利用して石垣を築いた後、区画(棧敷)を造り、各種の催しを観覧できるようにしたもの。棧敷は江戸時代後期から次第に増加し、現在でも364面ほどが大祭などで使用されている。	香川県 土庄町
③⑧	せきぶし 石節	未指定 (無形民俗)	小豆島に伝わる、石工たちによってうたわれた唄である。手作業で石を切っていた石工たちの当時の様子を感じられる。	香川県 小豆島町・ 土庄町
③⑨	がき しし垣	町有形民俗/ 町史跡/ 未指定	小豆島内を張り巡らせるように築かれたしし垣は全長120kmにも及ぶ。イノシシやシカなど鳥獣から田畑を守るために作られたしし垣については、築造から維持管理を村人全員で行うことを申し合わせた記録もあり、当時の人々にとっていかに石を積むことが身近なものだったかを表している。	香川県 小豆島町・ 土庄町
④⑩	から と おか し みず 唐櫃岡の清水 きょうどうようすいじょう 共同用水場	国登録有形 (建造物)	山の斜面を利用し地元産の花崗岩で作られた水場。湧水を花崗岩の石壁でいったんせき止め、最上部の貯水槽から三つの小水槽と大水槽に流す仕組み。地元の人に大切にされ、いまでも花崗岩が湧水を守っている。	香川県 土庄町
④⑪	おうとうざん おうとう さばく 王頭山(王頭砂漠)	未指定 (名勝地)	広島を半分を占める王頭山。山頂近くには、「王頭砂漠」と呼ばれる空中庭園のような場所もある。花崗岩が風化してできた真砂土が砂漠のように広がり、コロコロと花崗岩の自然石が点在している。その昔、立派な寺社が建っていたという坊主屋敷の伝説が残っている。	香川県 丸亀市
④⑫	しんぎょうざん 心経山	未指定 (名勝地)	瀬戸内の眺望が良く、巨岩や怪石が露呈する弘法大師ゆかりの霊場。山頂の巨石には神仏が祀られる。心経山の丁場から切り出される花崗岩は「青木石」として知られている。	香川県 丸亀市

④③	たかしま 高島	国名勝	高島は古事記・日本書紀にいう神武天皇の「高島宮」であったとする伝説が古くから伝わる。大正8年(1919)、伝説を顕彰するため島の最高峰「神ト山」の山頂に、巨石を用いた高さ8mの「神武天皇行宮遺址碑」が建立された。	岡山県 笠岡市
④④	かいりゅうじ 開龍寺	未指定 (建造物)	白石島の古刹。弘法大師伝説の残る大師堂は、巨石の下に建てられており、荘厳な雰囲気をかもし出す。巨石と信仰の融合を物語る建造物。	岡山県 笠岡市
④⑤	しらいしじま 白石島	国名勝	白石島の山々には、「白石」の名のとおり巨石・奇岩が露出している。「びくに岩」など、信仰の対象となり神が祭られた巨石も見られる。山頂の遊歩道を巡ると、様々な巨石・奇岩と瀬戸内海の眺望を堪能できる。	岡山県 笠岡市
④⑥	きたぎしまいしきりうた 北木島石切唄	未指定 (無形民俗)	北木島で受け継がれる作業歌。まだ手作業で石を切っていた時代、石工たちが山から石を切り出し、割るときに唄っていた。伝統文化として保存会が継承している。	岡山県 笠岡市
④⑦	きゅうえい が かん ひかりげきじょう 旧映画館「光劇場」	未指定 (建造物)	北木島が石材業の発展により活気にあふれていた頃の映画館。昭和20年代終わりから42年頃まで営業しており、石工たちに娯楽を提供した。当時の設備や映写機をそのまま残している。現在では北木島の石文化に関する映像上映等で活用されている。	岡山県 笠岡市
④⑧	おおびしまいせき 大飛島遺跡	市史跡	大飛島の砂洲の付け根にある巨石群は、奈良・平安時代に信仰の対象となり、都びとたちによって数々の宝物が捧げられた。遣唐使などの航海の無事を祈った祭祀跡といわれる。古代の巨石信仰を物語る遺跡。	岡山県 笠岡市

構成文化財の写真一覧

①大坂城石垣石丁場跡

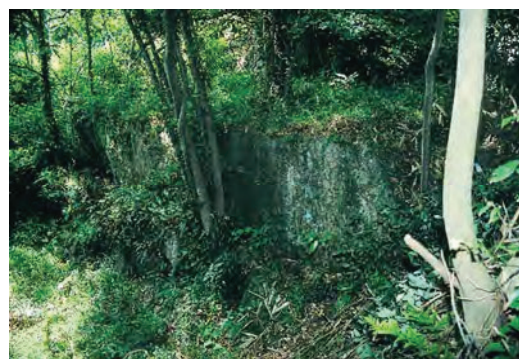
【天狗岩丁場・天狗岩磯丁場・南谷丁場・豆腐石丁場・亀崎丁場・八人石丁場】



②大坂城用残石番屋七兵衛屋敷跡



③大坂城築城残石 (福田)



④ ^{もりがたき}森ヶ滝丁場跡



⑥ 大坂城築城残石 (石場)



⑤ 山の神祭り



⑧ 大坂城石垣石切北山・とびがらす・
^{きたやま}宮ノ上丁場跡



⑦ 大坂城石垣石切とび越^{こし}丁場跡および
^{おみ}小海残石群 (大坂城残石記念公園)



せんげちょう ばあと こせばらちょう ばあと
⑨大坂城石垣石切千軒 丁 場跡・小瀬原 丁 場跡



⑩八幡神社石鳥居



しわくほんじまたかんぼうやまいしきりちょう ばあと
⑪塩飽本島高無坊山石切 丁 場跡



としより
⑫年寄の墓



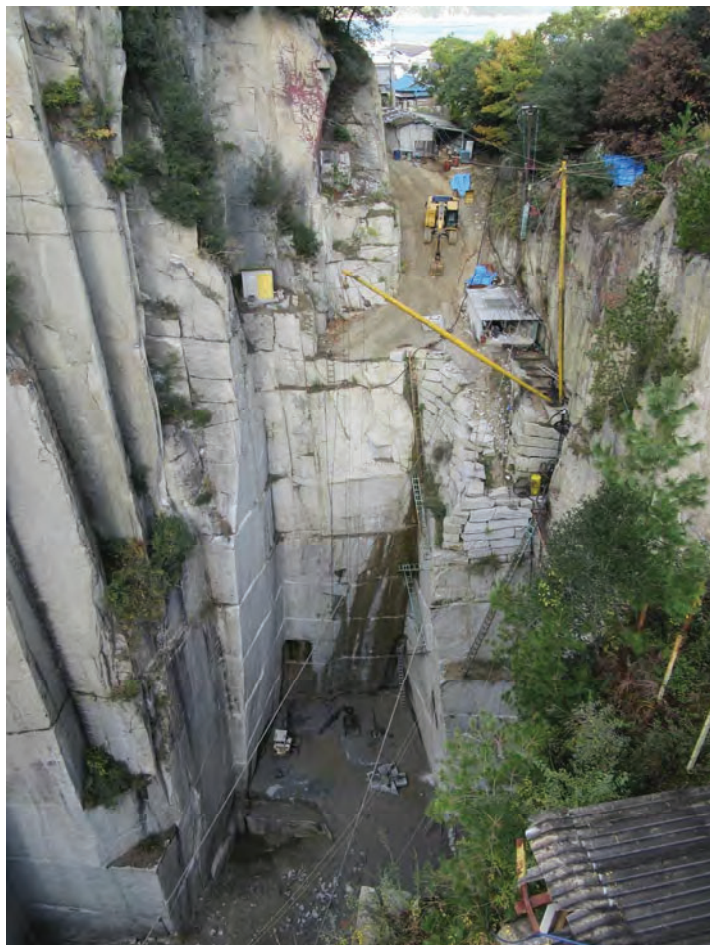
こがらす
⑬木鳥神社鳥居



⑭石の里資料館収蔵資料



⑮北木石の丁場 ちょうば



⑰北木島の石工用具

⑯北木島の丁場湖 ちょうばこ



⑱醤油蔵と石道具の町並み ひしお (醬の郷)



⑳塩飽勤番所 しわくきんぱんしよ



㉑大部ろくろ場跡 おおべ ぼあと



㉒笠島集落 かさしま



㉓土庄本町地区の町並み (迷路のまち)



㉔慶長小豆島絵図及び正保小豆島絵図



㉕千歳座 ちとせざ



^{ほぶしいわ}
⑳波節岩灯標



^{ほぶしいわ}
㉑石蔵 (旧波節岩灯標脂油庫)



^{おのえ}
㉒尾上邸



^{ち はま}
㉓千ノ浜の護岸景観



㉨真鍋家住宅



㉩大石山



かんかけやま かんかけい
㉪神懸山 (寒霞溪)



㉫小豆島の山岳霊場



③② さじき 池田の 棧敷



③⑥ いしき 石切り 寿司



③④ 小豆島農村歌舞伎及び舞台, 石の 棧敷席



③⑦ とみおかはちまんじんじゃ さじき 富丘八幡神社の 棧敷



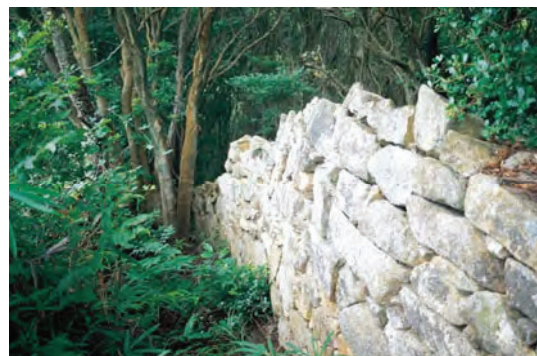
③⑤ かさねいわ 重岩



③⑧ せきぶし 石節



③⑨ しし垣



④② ^{しんぎょうざん}心経山



④④ ^{からとおか しみず}唐櫃岡の清水共同用水場



④⑤ 高島 (名勝)



④① ^{おうとうざん おうとう}王頭山 (王頭砂漠)



④④ 開龍寺



④⑤白石島 (名勝)



④⑧大飛島遺跡



④⑥北木島石切唄



④⑦旧映画館「光劇場」



日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
80	知ってる！？悠久の時間が流れる石の島 ～海を越え、日本の礎を築いた せとうち備讃諸島～

(1) 将来像 (ビジョン)

【地域のあるべき姿】

元号が平成から令和へ、新たな時代の幕が開けた年、せとうち備讃諸島の石の物語が日本遺産に認定され、地域活性化への取組がスタートした。

私たちの日本遺産は、“離島”のみで構成するという特徴を持っているが、令和に入り、日本の総人口が減少するなかで、“離島”の人口は、極めて厳しい状況にある。

20年、30年先の将来を展望した場合、島民の暮らしに不可欠な航路の存続をはじめ、社会生活と経済活動の持続性確保は、最大の課題であり、その対策は待ったなしのところまで来ている。

私たちはこの現状を決して悲観することなく、日本遺産という仕組みをフルに活用し、文化の力によって、山積する課題を乗り越えていかなければならない。

そのためには、日本遺産の力によって、地域住民が地域への誇りを取り戻し、シビックプライドを醸成していく、言い換えれば歴史と文化を勇気に変えて地域活性化に取組み、20年、30年先も心豊かで尊厳のある暮らしを実現したいと考えている。

また、島の生活を持続し、地域の活性化を図るためには、来訪者による産業振興・経済発展が不可欠である。来訪者は、地域住民等が懸命に保存・継承してきた構成文化財に感動し、少し照れながらも嬉しそうにストーリーを語る住民やガイドの姿に共感するとともに、民間事業者が創造した商品を楽しむことで高い満足度を得る、こうした好循環の状態を生み出していくべきである。この理念は、まちづくり計画と通じるものであり、日本遺産「石の島」でつながる2市2町の総合計画・総合戦略等において、文化・観光政策の柱の役割を果たすと考えている。

こうした将来像を実現するため、「地域活性化計画2.0」をここに定め、今後3年間の取組を確実に実行し、7つの柱に基づく事業を力強く推進することで、20年先、30年先も「悠久の時間が流れる石の島」であり続けたいと願っている。

私たちは、先人がその暮らしのなかで育み、途方もない年月と懸命な努力によって引き継いできた宝物を、日本遺産の活動を通じて、新しい魅力を加え、確実に次の世代へと繋げていかなければならない。

(2) 地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること						
指標①-A：構成文化財への来訪者数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	188,829	237,325	275,790	280,000	285,000	290,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	<p>指標は、構成市町の構成文化財への来訪者（1～12月）の総数とし、目標値の設定は、2024（R6）年度を基準とし、2027（R9）年度で+5%を目指す。</p> <p>把握方法は、日本遺産ストーリーの構成文化財である箇所に来客数の実測とする。</p> <p>（笠岡市：北木石の丁場（石切りの溪谷展望台）、丸亀市：塩飽勤番所、土庄町：大坂城残石記念公園、小豆島町：寒霞溪）</p>					

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること						
指標①-B：新設する日本遺産センターの体験来訪者数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	—	—	—	300	300	300
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	<p>日本遺産センターの体験来訪者数を指標とする。新設であるため、数値の設定が難しいが、目標値としては、年間100日程度の開館・1日平均3人程度の体験来訪者数を見込む。</p> <p>把握方法は、ストーリー等を解説する学術専門員等が直接カウントする。</p>					

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること						
指標②－A：日本遺産「石の島」の認知度の割合（単位：％）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	50	48	— <small>（調査中）（審査時） 49 <small>（審査後に判明した実績値）</small></small>	—	—	53
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		<p>指標は、構成市町における日本遺産「石の島」ストーリーの認知度の平均値とし、2023（R5）年度に実施したアンケート数値を基準とし、2027（R9）年度で+5ポイントを目指す。</p> <p>把握方法は、構成市町の住民を対象に、無作為抽出による共通アンケートを実施する。</p>				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：構成市町の宿泊者の観光消費額（単位：円）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	127億 6,629万円	144億 8,133万円	調査中	146億 9,855万円	149億 1,577万円	152億 540万円
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		<p>構成市町の宿泊者の観光消費額の合計値を指標とする。</p> <p>目標値は、2023（R5）年度を基準とし、2027（R9）年度で+5%を目指す。</p> <p>把握方法は、構成市町における宿泊客数と岡山県観光客動態調査（R4 県外宿泊観光客 30,494 円/人 R5 県外宿泊観光客 38,565 円/人）、香川県観光客動態調査（R4 県外宿泊観光客 30,748 円/人 R5 県外宿泊観光客 28,611 円/人）の観光消費額単価（最新の公表）に基づき、経済効果を算出する。</p>				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－B：日本遺産に係る旅行商品売上金額（単位：千円）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	—	—	—	100	200	300
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		<p>地域連携 DMO 観光協会、旅行会社等、民間事業者の売上金額を指標とする。新規の取組であるため、当初は無理のない金額とし、2倍、3倍の拡大を目指す。</p> <p>把握方法は、民間事業者への丁寧な聞き取り調査を実施する。</p>				

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：ふるさと納税を活用した、構成文化財の保存・活用の金額（単位：千円）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	0	2,693	2,647	3,000	3,000	3,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成文化財の保存・活用事業費に充当したふるさと納税を指標とする。2025（R7）年度当初予算計上額をベースに目標値を設定している。把握方法としては、財政担当課へ毎年度の決算充当金額を確認する。					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：構成市町の観光客数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	5,440,000	5,682,000	5,659,000	5,744,000	5,829,000	5,942,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成市町の延べ観光客数（1～12月）を指標とする。2024（R6）年度を基準とし、2027（R9）年度で+5%を目指す。把握方法は、市町等の公表統計値による。					

(3) 地域活性化のための取組の概要

【地域の現状・成果・課題】

日本の総人口が減少するなかで、条件不利地域といわれる“離島”の人口減少は、航路の衰退もあって、極めて厳しい状況にある。また、人口の減少によって、地域のコミュニティ力は低下し、全ての産業において担い手が不足するなど、島の持続可能性が問われており、地域活性化に向けた取組みは待ったなしのところまで来ている。

このような状況のなかで、地域の資源である“石”と‘海’、そこから派生した地域固有の伝統文化と産業をストーリーとした日本遺産による地域づくりが令和元年度にスタートした。

認定初年度の「さあ！これから」という時にコロナが発生し、人と人との接触をはじめ、あらゆる活動が制限されるなかで、地域活性化計画の実行は、様々な困難を伴うものであった。

しかしながら、日本遺産「石の島」でつながる2市2町の首長が先頭に立って「せとうち備讃諸島日本遺産推進協議会」を力強く牽引（年2回の総会には4人の首長が参加）し、地域住民はもとより、観光・商工事業者、学校等の教育機関、文化関係者等の賛同・協力を頂き、それぞれの立場での主体的な取組みが実現した事で、備讃諸島ならではの歴史的・文化的な価値の蓄積が進み、地域活性化への“種まき”と“芽生え”が生まれたところである。

具体的には、①観光協会のDMO取得（丸亀市・小豆島）、②石の島ガイドの養成・実践と島々のガイドを束ね横連携するガイドの組織化、③ふるさと納税の大幅な拡大、④首長のリーダーシップによる行政計画への明確化、⑤構成文化財の基盤整備（解説板・遊歩道整備・周辺トイレ整備等）の進捗、⑥民間事業者の手による飲食・宿泊施設の新規開店、⑦レンタル自転車の増大等二次交通の充実、⑧玄関となる港の整備、⑨ストーリーにまつわる新規商品開発、⑩シビックプライドを醸成するシンポジウム・ワークショップ等の開催、⑪HP、SNS、メディア等を活かした情報発信、⑫全国イベントへのフル参加（2市2町が欠けることなくPR）等を展開してきている。

一方で課題も山積しており、具体的には、①日本遺産を牽引する協議会運営については、まだまだ行政主体の色合いが強く、民間事業者の関わりが弱いため、更なる連携強化と事業者自らの主体的な取組みの誘発、②核となるリーダーの配置・育成、③事業のテーマごとに組織を体系化する仕組みづくり、④自治体内における部局間の連携強化等、協議会の組織強化を図る必要がある。

さらに、加速度的に進む人口減少によって、島の担い手確保には限界があることから、都市部の高いスキルを持った人材を呼び込む仕組みを構築することが求められている。

また、「地域内外の人々がストーリーに触れ、その魅力を体験する。」という本質的なテーマを実現する拠点の整備が急務であり、日本遺産認定前からの課題であった「島々を周遊する仕掛けづくり」にも継続して取り組んでいく必要がある。

以上のような現状と課題について、目を背けることなく認識し、真正面から確実に取組を進めるため、令和7年度から今後3年間の「地域活性化のための取組の概要」を定めるものである。

【今後3年間の取組の概要】

① 組織整備

最大の課題である「せとうち備讃諸島日本遺産推進協議会」の体制強化を図る。具体的には、事業を統括し、推進力を高めるための「プロジェクトリーダー」、「サブリーダー」を新たに配置する。また、事業のテーマごとにグループを整備し、観光関係者（DMO）をはじめ、民間事業者の主体的な参画を促す仕組みを構築することで、産・官・学・民が連携し、それぞれの役割分担の下、日本遺産に関わる全ての関係者が主人公（当事者）になることを目指す。協議会は全ての事業を動かすエンジンであることから、体制強化は日本遺産の持続性を強固にし、目指すべき将来の実現に向けて、機動力を高めることが出来る。

② 戦略立案

大胆かつ実効力のある戦略を立案するため、本協議会の強みである首長の直接的な関与・陣頭指揮体制を一層高めていく。具体的には、首長自らが主導する協議会総会において、事業計画・予算・組織体制等の徹底的な検証と改善を進めるほか、2市2町の幹部職員で構成する幹事会定例会を創設する。さらに政策担当課長・財政担当課長の意見を取り入れる仕組みも構築し、まちづくり計画との関係性を明確化し、必要となる予算を中期財政計画に位置付けることで、予算獲得の安定化と持続化につなげる。

③ 人材育成

将来に渡って優秀な人材を確保していくためには、離島の人材のみで完結することは、もはや不可能である。従って、優れたスキルを持つ都市部の若者を呼び込む施策が必要であり、具体的には、総務省の「地域おこし協力隊」制度を活用し、未来に向けて持続可能な人材の確保を図り、将来のリーダーへ育成していく。また、地域内外の人々がストーリーに触れ、その価値を体験するためには、物語を伝えるガイド人材のスキルアップが不可欠なことから、「つながるガイド会議」の仕組みをフル活用し、ツアー商品の開発等を通じて、ガイドが自ら稼ぎ、活躍する仕組みをつくっていく。さらに、各島々には既に地域で活躍している団体や人材が存在することから、緊密な関係を構築し、多様な事業展開と成功体験を重ねることで、地域への自信と愛着を深めていく。

加えて、事業テーマごとに新設するグループにコーディネーターを配置し、グループの機動力を高めるとともに、グループ研修等を通じた人材育成を推進する。

④ 基盤整備

シリアル型の日本遺産であるがため、石の島ストーリー全体を発信し、体験出来る仕掛けが不十分であったといえる。日本遺産は、短い時間軸では決して完結しないことから、事業の検証と改善を繰り返しながら、毎年の成長を目指す必要がある。このため、中核拠点となる「日本遺産センター・コーナー」を新設し、地域住民と来訪者の体験拠点を整備する。具体的には、廃校になった学校等、既存の公共施設を活用し、財政負担も考慮しながらスタートを切り、センターとして果たすべき役割について、仮説・検証・改善というPDCAを回しながら、未来に向けたセンターの持続的成長を目指す。

また、島々が財（金）を獲得しないと、日本遺産の持続性は確保出来ないことから、更なる宿泊・飲食施設の整備が不可欠である。日帰り観光では、数千円の消費しか期待出来ないが、宿泊を伴った場合、経済効果は数万円に跳ね上がることから、民間の力によるホテル・民宿等の整備を推進する。具体的には、総務省のローカル10,000プロジェクトを

はじめ、国の補助制度をフル活用し、地域金融機関等の伴走によって、初期投資を確保し、島の稼ぐ力を未来に向かって高めていく。

⑤ 観光事業化

ホテル・宿泊施設の整備については、構想からオープンまで、数年単位の時間が必要であり、誘客に向けての短期的な戦略が必要である。また、課題となっている2市2町の島々を周遊する仕掛けを開発しなければならない。このため、日本を代表する新造船「飛鳥Ⅲ」をはじめとする日本船籍はもちろんのこと、「COLAL GEOGRAPHER」等、外国船籍のクルーズ誘致を推進するとともに、スーパーヨットの寄港も促し、構成文化財へのガイドツアーや土産品等の販売促進につなげる。

また、ストーリーにまつわる商品開発に向けて、2市2町それぞれの助成制度を継続し、満足度の向上と地域経済の持続的発展を目指す。

⑥ 普及啓発

Uターン等、島の将来の人材を確保するためには、子どもたちが地域の歴史・文化に愛着を持ち、誇りを育み、島に帰って活躍したいと思う郷土愛を養うことが何より重要である。このため、学校への出前授業を継続するとともに、シンポジウムの開催や公民館での体験型ワークショップなどを粘り強く開催し、地道な普及啓発を推進する。

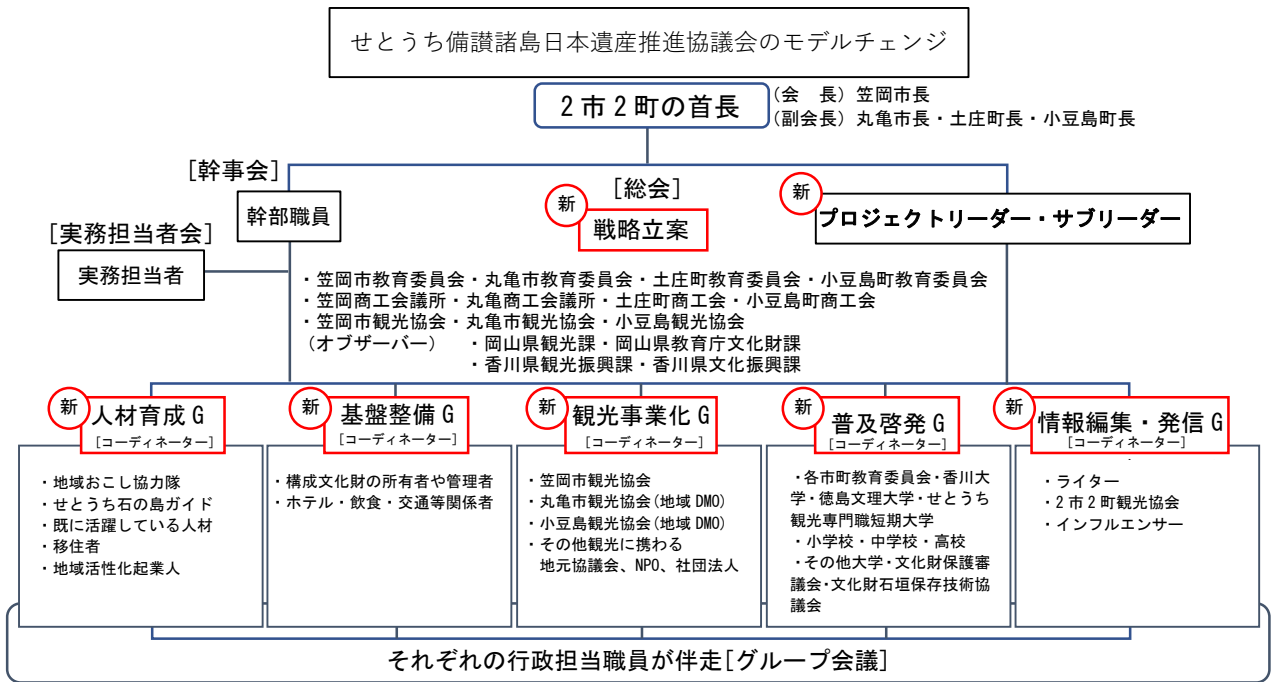
一方、包括連携協定による大学との域学連携や「文化財石垣保存技術協議会」との共同事業等を通じて、大学教授や石工等の研究者・技能者を招聘し、専門的知見から日本遺産の価値を直接住民へ伝播してもらい、時として当たり前存在になっている地域資源の魅力を今一度、掘り下げることでシビックプライドの醸成を実現していく。

⑦ 情報編集・発信

地域住民への日本遺産アンケート結果によると、石の島のストーリーを広めるための手段として、メディアを活かした情報発信を望む声が多くなっている。このため、映画のロケ地誘致をはじめ、テレビ番組での特集放送、地元ラジオへの出演等を継続展開し、戦略的な情報発信を持続することで、認知度向上へつなげていく。

また、モバイル対応の公式HPの更新頻度を高めるとともに、SNSのフォロワーを拡大することで、選ばれる日本遺産への道筋をつくっていく。

(4) 実施体制



[せとうち備讃諸島日本遺産推進協議会を主体とした体制強化]

日本遺産のエンジンである協議会の体制強化を実行する。

具体的には強みを活かし、弱点の補強・改善を断行することで、モデルチェンジを行う。本協議会の強みは、2市2町の首長が協議会運営に直接的に関与し、トップ自らが牽引している点にあり、その仕組みを継続していくことで、日本遺産事業を強力に推進する。一方、弱みについては、戦略立案を担う人材が不足している点にあり、「プロジェクトリーダー」、「サブリーダー」を新たに配置し、実施体制の強化を図る。

また、民間事業者の主体的な参画と活動を促すため、事業のテーマごとにグループを整備する。具体的には、「人材育成」、「基盤整備」、「観光事業化」、「普及啓発」、「情報編集・発信」の各グループを設け、グループ会議を通じて、情報の共有を図るとともに、事業推進の実効性を確保する。

さらに、2市2町における関係部局間の連携強化に向けて、幹部職員で構成する幹事会定例会の制度を創設するとともに、まちづくり計画との整合性を担保し、中期財政計画による財政的な裏付けを確保するため、政策担当部局・財政担当部局の意見を取り入れる。

こうした協議会の体制強化が「絵に描いた餅」で終わることがないように、総会・幹事会・実務担当者会は、定例的に開催する仕組みを構築する。

[人材育成・確保の方針]

地域おこし協力隊の活用をはじめ、ガイド人材のスキルアップ、地域で活躍している人材との緊密な連携、グループへのコーディネーター配置等により、将来を見据えた人材育成と確保を図っていく。さらに、観光事業化等に向けて、より専門性の高い人材も必要であることから、総務省の「企業派遣型地域活性化起業人」制度を活用し、実践力のある人材の確保を実施する。

また、2市2町では人口減少対策として移住施策に力点を置いているが、移住担当課との情報共有を強化し、日本遺産に興味を示す移住者に対し素早くアプローチし、新たな人材の発掘につなげる。

将来的な目標としては、子どもたちの郷土愛を育むことで、島にUターンする流れを生み出し、持続可能な人材を確保していく。

(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

[自治体による財源確保策]

協議会主体の戦略的かつ実効性のある事業展開を進め、日本遺産の取組を確実に推進するためには安定的な財源確保が必要である。

基本的には、2市2町の負担金を原資として協議会の財源とするが、2市2町の一般財源による負担は自治体の財政運営に影響することから、持続性のある財源確保が求められる。

幸いなことに、日本遺産認定後、ふるさと納税は大幅に拡大しており、今後も日本遺産をはじめとする島のPR、魅力ある返戻品の追加、ポータルサイトの拡大等によって、更なる獲得を目指していく。また、ふるさと納税の活用（行政用語の財源充当）は、財政担当課が実務を担うことから、日本遺産に必要となる予算の緊密な協議を進めるとともに、日本遺産の取組を中期財政計画へ確実に反映していく。

また、内閣府が推進する企業版ふるさと納税の活用も視野に入れ、先進自治体を参考に調査・研究を進める。

2市2町においても、地域の実情に合わせた財源確保策を検討していく必要がある。小豆島においては、その一方策として、法定外目的税である「宿泊税」の導入に向けて一歩踏み出し、総務省や関係事業者等との協議を開始し、条例制定を目指していく。

加えて大型クルーズ船の誘致は、島の周遊性を高め観光消費を誘発するとともに、クルーズ船の寄港割合に応じて固定資産税（償却資産課税）の大臣配分がなされることから、財源確保の観点からも重要な取組であり、税務担当課との連携によって、さらなる拡大を図る。

こうした重層的な財源確保策によって、日本遺産事業が将来に渡り持続できるよう基盤を整えていく。

[民間事業者・協議会による財源確保策]

ガイドツアーの催行をはじめ、日本遺産関連商品の開発と販売を推進し、稼ぐ力を高めていく。民間事業者の売上は、最終的には自治体の税収増加に繋がることから、長期的な視点に立って取組を進めていく。また、協議会が単費で作成したトートバック等の関連グッズを全国イベントで販売し、地道な財源確保策を実行する。

(6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

日本遺産を構成する文化財は、島の先人がその暮らしの中で育み、途方もない年月と懸命な努力によって引き継いできた地域の宝であり、備讃諸島の歴史・文化の象徴といえる。

島に生きる私たちは、先人に感謝し、構成文化財の保存と活用を通じて、新しい魅力を加え、確実に次の世代へと繋げていかなければならない。

私たちにとって、当たり前となっている風景や歴史・文化が、人口減少という荒波によって、失われるかも知れないという強い危機感を島の人々が共有しなければならない。

このため、新たな地域活性化計画を定め、まずは今後3年間の取組を確実に実行し、7つの柱に基づく事業を力強く推進することで、構成文化財の保存と活用の好循環が創出されたと考えている。

構成文化財を守り、継承していく主人公は、言うまでもなく島に暮らす人々であり、来訪者の応援によって、その保存・活用の行動は熟度を増していく。

自分たちの地域は自分たちで守るという誇りを取り戻し、日本遺産の活動を通じて、地域活性化を実現していかなければならない。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	事業の全体統括を行う組織の整備及び協議会の体制強化		
概要	地域活性化計画の実現に向け、せとうち備讃諸島日本遺産推進協議会の体制強化を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	プロジェクトリーダーの配置	戦略立案の推進力を高めるため、日本遺産オフィシャルパートナーシッププログラム等を活用し、プロジェクトリーダーを配置する。	協議会
②	プロジェクトサブリーダーの配置	サブリーダーを配置し、次期リーダーとして育成する。	協議会
③	定例連絡会議の設置	月1回程度の事務担当者連絡会議を開催	協議会
④			
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	プロジェクトリーダーの配置数		-
2023			-
2024			-
2025	プロジェクトリーダーの配置数		1名
2026	プロジェクトリーダーの配置数		1名
2027	プロジェクトリーダーの配置数		1名
事業費	2025年度：100千円 2026年度：100千円 2027年度：100千円		
継続に向けた事業設計	協議会の運営費用等については2市2町がふるさと納税等を活用し、負担する。		

(事業番号 1-B)

事業名	事業の企画・実施を行うグループの設置		
概要	計画に基づく事業を中心となって企画・実施する役割を担うグループの整備。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	事業を推進するグループの整備	民間事業者を主体とした人材育成、基盤整備、観光事業化、普及啓発、情報編集・発信を担う各グループを設置する。	協議会及び民間事業者
②			
③			
④			
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	各グループが企画実施した事業の数		-
2023			-
2024			-
2025	各グループが企画実施した事業の数		0 件
2026	各グループが企画実施した事業の数		5 件
2027	各グループが企画実施した事業の数		10 件
事業費	2025 年度 : 0 円 2026 年度 : 250 千円 2027 年度 : 500 千円		
継続に向けた事業設計	各グループの事業化に向けた費用については協議会が予算化する。		

(事業番号 1-C)

事業名	せとうち備讃諸島日本遺産推進協議会の財源の確保		
概要	日本遺産推進協議会の体制強化あるいは事業の企画実施を行うための財源を確保する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	ふるさと納税を活用した財源の確保	日本遺産をはじめ2市2町の観光資源を積極的にPRすることによってふるさと納税を獲得する。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
②	企業版ふるさと納税を活用した財源の確保	地方創生応援税制を活用し、日本遺産を応援する企業からの寄付金を獲得する。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
③			
④			
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	ふるさと納税を活用した日本遺産事業費への充当金額		21,979千円
2023			25,985千円(審査時) 17,956千円(審査後に判明した実績値)
2024			17,077千円(予算)(審査時) 24,216千円(審査後に判明した実績値)
2025			20,000千円
2026	ふるさと納税を活用した日本遺産事業費への充当金額		20,000千円
2027	ふるさと納税を活用した日本遺産事業費への充当金額		20,000千円
事業費	2025年度:10,000千円 2026年度:10,000千円 2027年度:10,000千円		
継続に向けた事業設計	2市2町の魅力ある特産品(返戻品)のさらなる充実とポータルサイトの充実。		

(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

事業名	戦略立案体制の強化		
概要	新設するプロジェクトリーダーを中心に、協議会の定例会制度を構築し、事業の進捗状況確認、情報共有、課題改善を図る		
	取組名	取組内容	実施主体
①	協議会総会の実施	2市2町の首長をはじめ、関係機関が一同に会する総会を年2回開催し、首長のリーダーシップの下、まちづくりとの整合性を確保する。	協議会
②	幹事会定例会の創設	2市2町の担当部課長からなる幹事会を年4回開催し、「地域活性化のための取組みの概要」の進捗状況の点検、改善方策を担当者に指示する。	協議会
③	担当者会議の定例化	プロジェクトリーダーを中心に担当者会議を月1回程度開催し、目標値等の進捗状況の確認、情報共有、課題改善を図る。	協議会
④	新設するグループ会議の創設	人材育成、基盤整備、観光事業化、普及啓発、情報編集・発信の各グループが事業の協議・改善を図る会議を随時開催する。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	協議会の開催頻度		8回
2023			10回
2024			10回 (2月末時点) (審査時) 11回 (審査後に判明した実績値)
2025	協議会(定例会)・グループ会議の開催頻度	19回	
2026	協議会(定例会)・グループ会議の開催頻度	19回	
2027	協議会(定例会)・グループ会議の開催頻度	19回	
事業費	2025年度：200千円 2026年度：200千円 2027年度：200千円		
継続に向けた事業設計	2市2町の首長が直接参画することで、戦略立案の確実な継続展開を確保する。また、プロジェクトリーダーの新設により定例的な会議推進を担保する。		

(事業番号 2-B)

事業名	まちづくり計画への位置付け		
概要	総合計画をはじめ、2市2町のまちづくりの基本となる行政計画へ日本遺産の戦略立案を位置付ける。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	行政計画への明確化	総合計画、総合戦略、観光ビジョン、文化財保存活用地域計画等へ日本遺産のビジョン・取組を盛り込み、まちづくりとの整合性を確保する。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
②			
③			
④			
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	日本遺産との関係性を明確化した行政計画の数		8 計画
2023			14 計画
2024			15 計画
2025	日本遺産との関係性を明確化した行政計画の数		15 計画
2026	日本遺産との関係性を明確化した行政計画の数		15 計画
2027	日本遺産との関係性を明確化した行政計画の数		15 計画
事業費	2025 年度：31,500 千円 2026 年度：0 千円 2027 年度：4,000 千円		
継続に向けた事業設計	2市2町の首長自らが、行政計画への位置づけをまちづくり担当部署等へ指示するとともに、パブリックコメントによる住民理解の促進と議会の同意等を得ることで、継続性を確保していく。		

(7) - 3 人材育成

(事業番号3-A)

事業名	コーディネーターの配置と既存人材の活用		
概要	新設する人材育成、基盤整備、観光事業化、普及啓発、情報編集・発信の各グループにコーディネーターを配置し、研鑽を通じてスキルの向上を図る。 島ですでに活躍している人材にアプローチし、日本遺産事業への理解協力を促す。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	コーディネーターの配置と能力開発	各グループにコーディネーターを配置し、さらなる能力開発に向け日本遺産事業を学ぶ研修会を開催する。	協議会
②	既に地域で活躍している人材の理解・協力の促進	島ですでに活躍している人材にアプローチし、日本遺産事業への理解協力を促すことで、新たな人材の確保につなげる。	協議会
③			
④			
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	各グループで開催する研修会への参加者数		-
2023			-
2024			-
2025	各グループで開催する研修会への参加者数		15人
2026	各グループで開催する研修会への参加者数		15人
2027	各グループで開催する研修会への参加者数		15人
事業費	2025年度：100千円 2026年度：100千円 2027年度：100千円		
継続に向けた事業設計	各グループの円滑な運営とコーディネーター配置に向けて協議会が丁寧支援し、予算を確保していく。		

(事業番号3-B)

事業名		ガイド人材の活躍	
概要		日本遺産石の島ガイドの育成、スキルアップ、ガイド組織の強化とイベント参加や商品開発等、ガイドの活躍を促す。	
	取組名	取組内容	実施主体
①	ガイドスキルアップ講座の実施	日本遺産の魅力を伝えることのできるガイドの育成、ガイドのスキルアップ向上のための講座等を実施。	協議会
②	日本遺産ガイド組織の強化と周辺ガイド組織との連携	ガイドの中心となる“結び人”を軸に、地域ミーティング（笠岡、塩飽、小豆島）と全体ミーティングを実施し、ガイド間の連携を深め、交流を促進する。 また丸亀城等周辺ガイド組織との連携により周遊を促す。	つながるガイド会議
③	日本遺産関連イベントでの石の島ガイドの活用	日本遺産ストーリーの知識が豊富な石の島ガイドに日本遺産関連イベントへ参加してもらい、魅力を発信する。	協議会
④	ガイドツアー商品の開発	日本遺産石の島ガイドが主体となり、ツアー商品の開発を推進する	つながるガイド会議
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	ガイド件数		-
2023			157件
2024			90件（1月末時点）（審査時） 127件（審査後に判明した実績値）
2025	ガイド件数		160件
2026	ガイド件数		160件
2027	ガイド件数		160件
事業費	2025年度：1,000千円 2026年度：1,000千円 2027年度：1,000千円		
継続に向けた事業設計	つながるガイド会議が主体となり、地域間連携を図り、地域ミーティング、全体ミーティングを重ねていくことで、継続的な取組を推進していく。		

(事業番号 3 - C)

事業名	地域おこし協力隊員の活用		
概要	都市部の高いスキルを持った人材を地域おこし協力隊員として採用し、関係機関へ派遣することで将来の人材育成と確保に繋げる。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	地域おこし協力隊員の活躍	総務省の制度である地域おこし協力隊員を新たに採用し、将来的にはプロジェクトリーダーやコーディネーターを担う人材へと育成していく。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
②			
③			
④			
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022			-
2023	地域おこし協力隊の活躍人数		1人
2024			1人
2025	地域おこし協力隊の活躍人数		1人
2026	地域おこし協力隊の活躍人数		2人
2027	地域おこし協力隊の活躍人数		2人
事業費	2025年度：5,500千円 2026年度：11,000千円 2027年度：11,000千円		
継続に向けた事業設計	2市2町のホームページ、移住交流サイト等を通じて全国の都市部から優秀な人材を募集する。特別交付税措置の継続・拡大を総務省に要望していく。		

(7) - 4 整備

(事業番号4-A)

事業名	ストーリーを伝える拠点施設（日本遺産センター等）の整備		
概要	日本遺産ストーリーや構成文化財の魅力を来訪者へ体験してもらうため、拠点施設等の整備を推進する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産センター・コーナーの新設	地域住民、来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験する日本遺産センター・コーナーを新設する。また各島の情報発信拠点の強化を図る。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
②	ストーリーを伝える展示の整備	日本遺産センター・コーナーにおける展示の充実を図る。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
③	案内・解説板の整備	案内標識・解説板の定期的な点検等を通じて、来訪者の導線確保と情報発信の機能を持続する。また、看板更新の際には多言語化を含め、情報発信力を強化する。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
④	周辺環境の整備	構成文化財等を訪れる地域住民、観光客の満足度向上のため、トイレ・駐車場・遊歩道等の環境整備を行う。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	ストーリーを伝える展示整備件数		-
2023			-
2024			-
2025	ストーリーを伝える展示整備件数		1件
2026	ストーリーを伝える展示整備件数		1件
2027	ストーリーを伝える展示整備件数		1件
事業費	2025年度：500千円 2026年度：500千円 2027年度：500千円		
継続に向けた事業設計	各市町の行政計画に日本遺産を位置づけ、日本遺産活用の重要性を示し、財政当局との丁寧な調整による予算確保やふるさと納税による財源を確保していく。		

(事業番号 4 - B)

事業名	宿泊施設・飲食店・交通アクセス等の整備		
概要	来訪者の満足度向上や地域の稼ぐ力を高めるため、観光インフラの整備を推進する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	宿泊施設の整備	古民家等を改修した民泊施設、ホテル等の新設を促し、観光消費額の向上に繋げる。	民間事業者
②	飲食店の整備	来訪者の満足度の向上と観光消費額の向上に向けて飲食店の新規開設を促す。	民間事業者
③	2次交通の充実	電動自転車、バイク等の2次交通を充実し、周遊性と利便性の向上を図る。	民間事業者
④			
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	民間宿泊施設の新規出店数		17件
2023			22件
2024			15件
2025			5件
2026	民間宿泊施設の新規出店数		5件
2027	民間宿泊施設の新規出店数		5件
事業費	2025年度：30百万円 2026年度：30百万円 2027年度：30百万円		
継続に向けた事業設計	総務省のローカル10,000プロジェクトなど国の補助制度の活用を民間事業者へ促し、初期投資費用を確保していく。		

(7) - 5 観光事業化

(事業番号5-A)

事業名	日本遺産ストーリーを体験する商品開発		
概要	ガイドツアーの催行、日本遺産ストーリーに関連する商品の開発、クルージング等による誘客を推進し、エリア内での消費拡大や経済効果を生み出す。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	石の島周遊ガイドツアー事業	日本遺産のストーリーを理解し、より深く楽しむことのできる、「石の島」周遊ガイドツアーを実施する。ブラッシュアップした後、ガイドツアーの販売を目指す。	地域 DMO 観光協会、民間事業者
②	新規商品の開発	日本遺産ストーリーをPRする商品開発を促すため、助成制度を継続実施する。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町、
③	クルーズ船の誘致	にっぽん丸、飛鳥Ⅱ、飛鳥Ⅲ、CORAL GEOGRAPHERなどクルーズ船の誘致に継続して取組み、構成文化財を巡ることで日本遺産への理解と観光消費額の向上、さらに備讃諸島の周遊(アイランドホッピング)を促す。	民間事業者
④	島内周遊促進事業	尾上邸等の構成文化財を活用し、島での宿泊を促すとともに、食文化やレンタサイクル等、島内周遊を楽しめるコンテンツを一体的に情報発信する。	協議会、笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
⑤	日本遺産関連グッズの販売	協議会が単費で制作したトートバッグ、マスキングテープ等を日本遺産フェスティバル等の全国イベントで販売し、財源の獲得と商品数の拡大を目指す。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	日本遺産関連商品数(累計)		51件
2023			71件
2024			85件(1月末時点)(審査時) 85件(審査後に判明した実績値)
2025	日本遺産関連商品数(新規)	8件	
2026	日本遺産関連商品数(新規)	8件	
2027	日本遺産関連商品数(新規)	8件	
事業費	2025年度:3,150千円 2026年度:3,150千円 2027年度:3,150千円		
継続に向けた事業設計	日本遺産の認知度を高め、商品事業化に参画する民間事業者を増やすことで、商品開発数を確保していく。初期投資を助成することで継続性を高めるとともに、協議会自らも稼ぐ仕組みを構築する。		

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-A)

事業名	子どもたちや地域住民への普及啓発		
概要	小学校・中学校・高校での出前授業の実施や構成文化財での探求活動を継続展開するとともに、地域住民のシビックプライド醸成に向けてシンポジウムやワークショップ等のイベントを開催する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	学校教育・若者交流連携事業	エリア内の小・中学校に出向いて出前講座を行うとともに、校外学習として児童生徒が日本遺産構成文化財を体験する機会を設ける。 高校の地域学とも連携し、若者が日本遺産に主体的に関わる機会を提供する。	協議会、笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
②	大学との域学連携等を活用した普及啓発	包括連携協定を結んでいる大学等との域学連携事業の機会に日本遺産ストーリーや構成文化財を紹介する。	笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
③	丸亀城を活用した普及啓発事業	丸亀城の石垣復旧工事が、日本遺産「石の島」でつながる市町から運んだ石によって行われていることを象徴的にアピールするとともに、「丸亀お城まつり」において継続的に普及啓発を行う。	協議会、笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
④	地域での継続的なイベント事業	地域において日本遺産のストーリーを紹介するワークショップ、パネル展示、シンポジウム等を開催し、継続的に普及啓発を行う。	協議会、笠岡市、丸亀市、土庄町、小豆島町
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	日本遺産ストーリーの学習体験をした児童・生徒の数		224人
2023			572人
2024			1,424人
2025	日本遺産ストーリーの学習体験をした人の数		1,500人
2026	日本遺産ストーリーの学習体験をした人の数		1,700人
2027	日本遺産ストーリーの学習体験をした人の数		2,000人
事業費	2025年度：2,400千円 2026年度：2,400千円 2027年度：2,400千円		
継続に向けた事業設計	教育委員会、学校、公民館等との連携・協力体制を強化し、継続的な学習体験機会を確保する。		

(7) - 7 情報編集・発信

(事業番号7-A)

事業名	戦略的な情報発信		
概要	公式HPやSNSを活用した情報発信により、日本遺産「石の島」ストーリーの魅力や交通アクセス、イベント情報などを発信		
	取組名	取組内容	実施主体
①	公式HPでの定期的な情報発信	モバイル対応済みの公式HPにおいて最新の情報を発信し続けるとともに、魅力的なコンテンツの充実を図る。各市町の関係機関や周辺施設のHPと相互リンクし、観光情報の機能強化を実施する。	協議会
②	SNSによる情報発信	情報編集・発信グループが主体となって、SNS発信の頻度を高め、プレゼントキャンペーン等を行い、フォロワーの増加を目指す。海外向け情報発信はエリア内居住の外国人によるSNS等での情報発信を進める。	協議会
③	イベント等での情報発信	全国規模のイベントにおいて、ブース出展を継続し、日本遺産ストーリーの認知度向上を図る。	協議会
④	メディアを活かした情報発信	映画をはじめ、テレビ番組、ラジオ放送等のメディアに取り上げられることで、情報発信の機会を拡大していく。	観光協会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	公式HP、SNSでの投稿数		103件
2023			116件
2024			180件(2月時点)(審査時) 180件(審査後に判明した実績値)
2025	公式HP、SNSでの投稿数		200件
2026	公式HP、SNSでの投稿数		200件
2027	公式HP、SNSでの投稿数		200件
事業費	2025年度：500千円 2026年度：500千円 2027年度：500千円		
継続に向けた事業設計	情報編集・発信グループを組織化することで定期的かつ継続的な情報発信の仕組みを構築する。		